

『カリスタ』にみるニューマンのパーソナリズム

——その一考察（3）——

長 倉 禮 子

I 序章

1. はじめに
2. あらすじ
3. 物語の舞台設定、描写、構成等について

II カリスタの人物像とその人格形成

1. カリスタの人物像
2. カリスタの人格形成の基盤
3. カリスタの人格的統一の深化

（以上第24号、25号掲載）

III カリスタの内的変化から人格的完成へ

前稿では、カリスタの人格形成の基盤をなしているものは何かを見、他の人格と出会うことによって彼女自身の人格がどのように影響され深化されていったのかを考察した。本稿では彼女の内面的変化を更に詳しく分析し、その人格的完成につながるイエスとの出会いへの道程の跡付けを試みる。

1. カリスタの内的変化⁽¹⁾

カリスタの内面的変化は、人間が様々な精神的機能を駆使して意識的に人格的成長を遂げていくのとは違い、彼女の中に最初に播かれたある種（the promise of its beginning）が内部から生成発展していくようなものである。その変化の過程は直接には経験できないが、ちょうど大地に播かれた種が日夜起き伏しするうちに芽生え、知らぬ間に成長しているのと似て説明のつかないものである。しかしあえて説明しようとすれば、同心円的发展とでも言えようか。次のように描写している。

Every day, as it came, was, so to say, the child of the preceding, the parent of that which followed ; and the end to which she tended could not get beyond the aim with which she set out. Yet, had she been asked, at the time of which we speak, where was her principle and her consistency, what was her logic, or whether she acted on reason, or on impulse, or on feeling, or in fancy, or in passion, she would have been reduced to silence. (pp. 291—292)

カリスタは既にかかなり以前から、自分の国の宗教と言われているものを信じてはいない。また哲学にしても、それは単なる推理であり、意見または見解のようなものに過ぎないと思っている。彼女は宗教の本質は、ある「対象」を是認することではないだろうかと本能的に感じている。その対象とは、我々

に語りかけ、我々を認め、我々を愛してくれる人格的な存在でなければならない。そして我々の側からは、義務や功德とかを含むかもしれないが、我々の靈魂に関心を持って下さるその方の招きに愛をもって応えていくことである。換言すれば、カリスタは、生きた愛による魂の人格的交わりが宗教というものではないかと感じているのである。⁽²⁾

彼女に対してキリスト教の証人となったあの三人は、それぞれに異なった生い立ちの人々であり、異なった環境にあり、異なった人格としてそれぞれ独自に自分の信仰を表明していた。それにも拘らず、彼らの言葉は共通していたし、彼ら一人一人における信仰と感情は驚くほどの一致を示していた。⁽³⁾それに、彼らはそれぞれ心の中に神的存在を宿していた。そしてそこには、人格と人格との友愛、または相互愛ともいべきものがあつた。彼らに共通していたこの生ける人格的存在との生き生きとした人格的な交わりが、カリスタの心に深い印象を刻みつけていたのである。ここには、彼女の心と理性とが久しく非常に強く渴望していたものがあるのではないかと感じられた。彼女がキリスト教についてこれまで聞いたことについて考えてみると、彼女はますますそれに惹かれていき、それは彼女の全靈に対して立証し、彼女の足掻き求めていたものに應えていくかのように思われ、何となく真実ではなからうかと予感していたことと近くなっていくのであつた。キリスト教のことを考えれば考えるほど、それはギリシャの神話や哲学、またはローマの政治と一致した宗教などのような観念的なものとも異なつて、現実的で目に見える実体のあるものと考えられてくるのであつた。そしてこのような漠然とした印象は、彼女自身の裡で次第に主体的な考察へと発展していき、やがて非常にはっきりした概念が形成されるに至つた。その概念はおおよそ次のようなものであつた。つまり全能全善で無限なる天地の創造主がおられる。その方は人々の魂、とりわけ彼女の魂を非常に愛されたので人間となつてこの世に来て下さつた。その方はすべての魂をご自分と一致させるために苦しみを引き受けて下さつた。⁽⁴⁾その方は愛することを望んでおられ、同時に愛を返されることを切望しておられ、それをご自分で語られ、愛してほしいと訴えられた。そしてその方はご自分を受け入れた人々の魂の中で実際に深い交わりをしておられるということである。⁽⁵⁾

カリスタには嫌気、疑い、否定、逃げ出したい気持ちなどがあつた。しかしこうした主観的な気分とは別に、どうしても逃げられないような力でますます強力に捕らえられていくのを経験する。⁽⁶⁾それはやがて彼女に微笑みかけ、約束し、「永遠」の視野を開かせ、明確な知覚と調和、それに説得力をもって彼女の確信を強めてくれたのである。彼女は自分の魂がそこへ向かっている対象をいまだはっきりとは掴んではいなかったが、目に見えるものにはもう飽き飽きしていたし、⁽⁷⁾まだそれとはよく解らないが、既にこの偉大なる真理の黙想へと駆り立てられていたのだ。確かに彼女の内面には大きな変化が起っているのである。

獄舎を訪れたポレモに対してカリスタは、自分の心の中に感じている神について語る。その方は彼女の心の中にあつて、「これをしなさい、あれをしてはいけない」と語りかけている。⁽⁸⁾それは自分とは別のある人格的な語りかけであつて、カリスタの方でもその人格的な存在に向かっている自分を経験している。それは単なる「何か」ではなく、地上のどんなものにもまして現実性をもって彼女の人格に迫ってくる存在であり、「誰か」なのである。

"I feel that God within my heart. I feel myself in His presence. He says to me, 'Do this: don't do that.' You may tell me that this dictate is a mere law of my nature, as is to joy or to grieve. I cannot understand this. No, it is the echo of a person speaking to me. Nothing shall persuade me that it does not ultimately proceed from a person external to me. It carries with it its proof of its divine origin. My nature feels toward it as towards a person. When I obey it, I feel a satisfaction; when I disobey, a soreness—just like that which I feel in pleasing or offending some revered friend. So you see, Polemo, I believe in what is more than a mere 'something.' I believe in what is more real to me than sun, moon, stars, and the fair earth, and the voice of friends. You will say, Who is He? Has He ever

told you anything about Himself ? Alas ! no ! — the more's the pity! But I will not give up what I have, because I have not more. An echo implies a voice ; a voice a speaker. That speaker I love and I fear.” (pp. 314—315)

しかし彼女はいまだその「方」の実体に触れ得ないでいる。彼女はその方を死ぬほど喘ぎ求めているが、まだまだ見出せず所有し得ないでいる。その心の足掻きは悲痛な叫びとなって迸り出る。

“O that I could find Him !” she exclaimed, passionately. “On the right hand and on the left I grope, but touch Him not. Why dost Thou fight against me ? — why dost Thou scare and perplex me, O First and Only Fair? I have Thee not, and I need Thee.” She added, “I am no Christian, you see, or I should have found Him ; or at least I should say I had found Him.” (p. 315)

彼女は自分の心の中に語りかける内面の導きである方をのみ礼拝し、その方に一切を捧げたいと切望しているのである。

“Shall I,” she continued, “worship any but Him ? Shall I say that He whom I see not, whom I seek, is our Jupiter, or Caesar, or the goddess Rome ? They are none of them images of this inward guide of mine. I sacrifice to Him alone.” (p. 315)

彼女の知性がそこへ向かっているものに対してはそれに応えてくれる何か具体的な対象がある筈だと思いつけてきた。また彼女はこれまで心の中に語りかける声を心の導きとして生きてきたが、その語りかけは他の一切のものとははっきり区別されるある人格的な存在である筈であった。こうしたすべての渴望を満たし得る対象と出会うことができれば直ちに全人格を持って応えていこうとする恭順さを彼女は備えている。⁽⁹⁾しかし彼女はまだ真理をも知らないし、語りかけの主体とも出会っていない。彼女は今、いわば中間地帯 (mid-way region of inquiry) とも言うべきところにいるのである。⁽¹⁰⁾

2. 自己との出会い

肉体的には獄舎の中の囚われの身であり、精神的には中間地帯にあるカリスタは、静寂と孤独の中で、シリシアスから「私たちが愛している方が誰であるかが書かれている」と言って手渡された、かの羊皮紙を帯の下から取り出して読み始める。カリスタは吸い込まれるようにしてその中へ入っていくが、読んでいくうちに、彼女がこれまで思い描いていたものとは全く違った新しい人間の状態や人の交わりといったものが見えてきた。それは余りにも美しくあり得ないことのように思えたが、彼女がそれまで思いも及ばなかった遙かに高い次元の完全性を備えた「方」がそこにおられたのである。

It opened a view of a new state and community of beings, which only seemed too beautiful to be possible. But not into a new state of things alone, but into the presence of One who was simply distinct and removed from anything that she had, in her most imaginative moments, ever depicted to her mind as ideal perfection. (p. 326)

更に読み進むうちに、彼女の知性が渇き求めていた対象と、彼女の心の中に呼びかけていたかのパーソナルな存在とが、形をとった一人の現実の姿として、次第に彼女に迫ってきた。そこには彼女の良心に語りかけ、彼女がその声を聞いていたその方が、そして彼女の方からも求めていた方が、そしてさらにカイオーニとアジェリアスの頬を愛で染めたその方がいたのである。

Here was that to which her intellect tended, though that intellect could not frame it. It could approve and acknowledge, when set before it, what it could not originate. Here was He who spoke to her in her conscience; whose Voice she heard, whose Person she was seeking for. Here was He who kindled a warmth on the cheek of both Chione and Agellius. (Ibid.)⁽¹¹⁾

その方の姿は彼女の中に深く入り込んできた。それは詩人の夢のようなものではなく、真理に満ちた現実の人間の姿であった。

That image sank deep into her; she felt it to be a reality. She said to herself, "This is no poet's dream; it is the delineation of a real individual. There is too much truth and nature, and life and exactness about it, to be anything else." (Ibid.)

彼女の知性とまた心の中の声とが求め続けてきた対象が、具体的な姿をとった人格としてはっきりしてくるにつれ、彼女にはそれまで見えていなかった自分の姿が見え始め、かつて経験したことのなかった自己認識を促されたのである。⁽¹²⁾

最初の反応は自己卑下であった。そして自分の本当の姿や惨めさがはっきりと見えてくると、彼女は自分を軽蔑し始めた。が、そのうちますます自己嫌悪に陥っていった。このようにしてカリスタは孤独の中で自分の真の姿を見詰めることとなったが、それはまた自分との本当の出会いでもあった。

カリスタが惨めさの淵に沈んだ時に、その淵へと神の憐れみの愛も下った。つまり、彼女が自分と出会ったその深淵に神の憐れみの愛が下り、その愛はそこから彼女を全く新しい世界へと引き上げたのである。⁽¹³⁾その転向点は、ルカ福音書第七章の罪深い女をイエスが許す場面 (Luke 7: 36—50) であった。哀れな罪の女に対するイエスの優しさと受容は、そのままカリスタに対する受容と受けとられたのである。

3. イエスとの出会いへ

カリスタは全く新しい世界へと転向し始めた。それはまず思想の変革であり、新しい思想はその新しさをもって彼女の心を太陽のように照らし始めた。

O what a new world of thought she had entered! it occupied her mind from its very novelty. Everything looked dull and dim by the side of it; . . . (pp. 326—327)

兄のアリストは彼女にかねがね「未来に信を置かず、現在を楽しめ」と言っていた。しかし彼女は現在を楽しむこともできず未来にも希望はなかった。さりとて信頼すべき何かをも持っていなかった。ところがこの書物はアリストが教えたこととは全く反対のことを教えてくれたのである。つまり、未来のために現在を犠牲にしなければならないこと、見えるものは見えないものへの真に譲らなければならないということであった。カリスタはこの書物の中にこの世とのパラドックスを次々と見出した。「真の喜びは放縦によってではなく、克己によって達成せられる」、「弱さが力である」、「知恵への道は愚かさである」、「栄光への道は不名誉を受けることである」などである。また彼女はこの自然の秩序や調和の背後には、それらを超えた美があることや、人間の知性や純粋な人間の愛が与え得るものよりも深い平和と静けさがあることを理解した。カリスタはカイオーニ、アジェリアス、そしてシシリアスの中にあって彼女に深い印象を与えたあの不思議なこの世のものならぬ落ち着きが何であったかを理解し始めた。彼らはこの世のどんな祝福よりも高い祝福をすでに所有していて、それを何ものにもまして愛しており、そのためにこの世に対する執着から解放されていたのだということを理解した。

こうしてカリスタは新しい哲学によって生きるようになった。否、哲学と言うよりは、生と死、行動、苦しみ、富や才能など人生のあらゆる問題に新しい意味を見出したのである。そして彼女は自分の存在も歴史も現在の状況も未来も、すべてを新しい光の中で見るようになった。しかし、彼女を支配していた思いは、この素晴らしい哲学をすべてご自分のなかで実際に生きて示して下さった「その方」であった。

But the ruling sovereign thought of the whole was He, who exemplified all this wonderful philosophy in Himself. (p. 328)

(1) 人格的呼びかけ——(信仰)

シシリウスが牢獄のカリスタを訪れた時、彼女は些かも迷うことなくキリスト教徒にして欲しいと懇願したのである。それが彼女をどんな運命に導くものであろうとも、彼女にはその方のために一切を賭する覚悟ができていた。あの罪の女にあれほど優しく語りかけて下さったその方が彼女にも語りかけておられると感じたからである。そして、その同じ方が彼女をも罪の重荷から解放して下さい、自分を受け入れて下さると希望し、それを確信さえしていたのである。

“My father,” she said, “I want to be a Christian, if I may; He came to save the lost sheep. I have learnt such things from this book—let me give it while I can. I am not long for this world. Give me Him who spoke so kindly to that woman. Take from me my load of sin, and then I will gladly go.”

...

“I am ready,” she insisted. “Deny me not my wish, when time is so urgent—if I may have it.” (pp. 344—345)

カリスタの中に際立っていた自然とは思えないほどのかつての威厳ある美しさはことごとく消え去り、自尊心は謙遜、単純、そして柔和に変わっているのをシシリウスは見た。この変化は試練がもたらしたというより、自己と出会い、自分の本当の姿を認め、自尊心から解放されて、あの方への想いと愛に生かされることによってもたらされたものであった。つまり、自己から出てあの方へ向かうことによって、謙遜、単純、そして柔和へと救われていくことにより生じた変化であった。⁽¹⁴⁾

What touched him most was the utter disappearance of the majesty of mien, which once was hers, a gift, so beautiful, so unsuitable to fallen man. There was instead of it a frank humility, a simplicity without concealment, an unresisting meekness, which seemed as if it would enable her, if trampled on, to smile and to kiss the feet that insulted her. She had lost every vestige of what the world worships under the titles of proper pride and self-respect. Callista was now living, not in the thought of herself, but of Another. (p. 345)

カリスタは謙遜と愛に支えられた信頼によって、本当に自分を愛して下さい方へと移行していくうちに、次第に自己から解放されていった。そして彼女は自分の一切を賭けるべき方として、既にその方を選んでいたのである。じっくりと、理性的に考え、その方を信じ、自由な意志によってその方を受け入れようと決断したのである。

“Father, I have chosen Him,” she answered, “not hastily, but on deliveration. I believe Him most absolutely. Keep me not from Him; give Him to me, if I may ask it; give me my Love.” (p. 346)

その方によって受け入れられたいという願望と、その方を自分も受け入れるという意志が同時に働いたのであるが、それ以上に、彼女の人格的決断に先行して、その方の側からの人格的な呼びかけと恩寵があったのである。⁽¹⁵⁾この両者の出会ったところでカリスタの回心 (Conversion) が行われた。

"He has done great things for me already; I am wonderfully changed; I am not what I was. He will do more still." (p. 346)

それは思想的発展の結果とか、心境の変化とかいったものではなく、イエスという一人の人格 (person) からの招きに対する応えとしての回心であった。彼女が出会ったのは、"He" であり、"Him" であり、また人格である "Love" でもあった。その方に全てを賭けるということがどういうことであったとしても、彼女はその方の招きに人格的に応えていかざるを得ないのである。⁽¹⁶⁾

"I will be a Christian; give me my place among them. Give me my place at the feet of Jesus, Son of Mary, my God. I wish to love Him. I think I can love Him. Make me His." (pp. 346—347)

カリスタの信仰は、マリアの子、人となった神、イエスという一人の人格に対するものである。その方は永遠からカリスタを愛していた。しかし、カリスタは今初めてそれを知った。それと同時に、彼女は自分が罪人であることを認識し、己れの無知を自覚した。そして愛されているという事実が目覚めた今、彼女の心の中には、その愛に己れを全く委ね、人格的に応えていきたいという熱望が湧き上がってきたのである。その方にすべてを委ねてしまう時、その方ご自身がご自分を教えて下さるだろうという信仰と信頼とともに。

(2) 人格的応え——(受洗)

She covered her eyes with her hands, and remained in profound meditation. "I am very ignorant—very sinful," she said at length; "but one thing I know, that there is but One to love in the whole world, and I wish to love him. I surrender myself to Him, if He will take me; and He shall teach me about Himself." (p. 347)

その方は罪人である自分を愛し、罪を赦して受容れて下さったばかりか、十字架の死に至るまで愛して下さったという信仰と共に、彼女の心にはその方に対する信頼が溢れ、いのちを賭けてもその方の愛に応えていこうという決定的な回心を伴ったものであった。カリスタの堅固な決意を知ったシシリウスは、洗礼、堅振、聖体の秘跡を受けようと決断した。

洗礼の水が額を流れるとき、カリスタはかつて味わったことのない静けさが心の中に生じてくるのを経験した。次いで堅振と聖体の秘跡が授けられたが、この間の出来ごとを作者は It was a sight for angels to look down upon, and they did. (p. 347) と書いている。聖体を受けるということは、信仰においてその方との愛の交わり (communion) に入ることである。そしてその唯一の方に賭けることは、今この迫害の嵐の中で、残忍な死を引き受けることでもあるが、カリスタは死を通してその方と相まみえることを固く信じて死を恐れていない。

The bishop gave her confirmation, and then the Holy Eucharist. It was her first and last communion; in a few days she renewed it, or rather completed it, under the very Face and Form of Him whom she now believed without seeing. "Farewell, my dearest of children," said Caecilius, "till the hour when both meet before the throne of God. A few sharp pangs which you can count and

measure, and all will be well. You will be carried through joyously, and like a conqueror. I know it. You could face the prospect before you were a Christian,⁽¹⁶⁾ and you will be equal to the actual trial, now that you are.”

“Never fear me, father,” she said in a clear, low voice. . . . (p. 348)

さまざまな試練を経、内面の変化を通して、信仰によってイエスと出会ったカリスタが到達したのは、肉体の苦痛や死への恐怖をも凌駕するほどの内的静けさ、心の平和であった。恩寵は弱さの中に受け入れられるもの⁽¹⁷⁾であって、人の心に内的統一を与え、愛と平和の実を結ぶものである。⁽¹⁸⁾かつてのカリスタから、新しいカリスタへの移行の状態を作者は次のように描写している。

O wisdom of the world! and strength of the world! what are you when matched beside the foolishness and the weakness of the Christian? You are great in resources, manifold in methods, hopeful in prospects; but one thing you have not,—and that is peace. You are always tumultuous, restless, apprehensive. You have nothing you can rely upon. You have no rock under your feet. But the humblest, feeblest Christian has that which is impossible to you. Callista had once felt the misery of maladies akin to yours. She had passed through doubt, anxiety, perplexity, despondency, passion; but now she was in peace. Now she feared the torture or the flame as little as the breeze which arose at nightfall, or the busy chatter of the grasshoppers at the noonday. Nay, rather, she did not think of torture and death at all, but was possessed by a peace which bore her up, as if bodily, on its mighty wings. . . . (pp. 353—354)

4. 人格の完成——(殉教)

地上での最後の晩カリスタは、乳母のカイオーニ、マリア、そしてイエスと思われる方の夢を見た。それは苦しみと死を通して栄光へ招かれることを示すような象徴的な夢であった。その夢から現実へと引き戻されたのは看守の妻の叫び声によってであった。彼女はカリスタはまだ若いのに過酷な扱いを受けて拷問死しなければならないことを哀れむが、カリスタは覚悟ができているとほほえんで言う。カリスタは、自分を愛し自分の為に死んで下さり、ご自分を与えて下さった方に出会ったのだ。そして今度はその方に自分を捧げることを決めたのだ。命を最高の生贄として捧げることを。彼女にとって死はもはや終わりではなく、永遠にその方と共にいる結婚のようなものである。⁽¹⁹⁾ある理想や主義主張などのために命を賭けると違って、確実に愛されていることを信じ、その人格的な愛に、全人格、全身全霊を尽くして応えていくこと、そこに於て彼女が選ばなければならなかった最終的な意志決定は、愛をもって死を引き受けることであった。⁽²⁰⁾

カリスタは看守の妻の親切に感謝し、彼女の為に祈るようになった。つまり、彼女のイエスに向かう人格的な愛は閉じられたものではなく、他に対しても開かれていく愛となったのである。⁽²¹⁾

“I am ready, mother,” Callista said, and she got up. “You have been very good to me,” she continued; “I have been saying many prayers for you, while my prayers were of no good, for then He was not mine. But now I have espoused Him, and am going to be married to-day, and He will hear me.” (p. 357)

法廷に出たカリスタは、はっきりと信仰告白を行う。彼女は、自分の全てを賭けることのできる真実で唯一無二の本当の愛を見つけた。この愛の前には一切の愛は太陽の光と熱で枯れ萎んでしまう草花のようである。⁽²²⁾血を流すことや苦しみと死の時に本当の愛が問われるのである。彼女は信仰、希望、愛の証として死を受容することをもはや躊躇しない。⁽²³⁾彼女が礼拝するのは、唯一真実である本当の愛な

る方である。(I worship my true Love, who is the Only True;...) その方は人となった神の御子である。(and He is the Son of God, and I know none but Him.) この真の神、真の御子に彼女は完全に帰依し、その方も彼女を完全にご自分のものとなしたもう。(He is the true Son of the True God; and I am His, and He is mine.) 愛の関係で結ばれるその方は、主であり、王であり、全てのものの支配者である。(I have but one Lord, the king of kings, the Ruler of all.) それゆえその方は、我々を完全に満たし得る方である。⁽²⁴⁾ (Let me alone; I am content with my One and only Lord.) その方は苦しみの中で来て下さる。いやもう来て下さった。その方と共に苦しむならば、苦しみは喜びでさえあるのだ。(He came to me amid much pain; and the pain was pleasant, for He came in it.) 信仰をかく表明して、拷問と死の宣告を受けたカリスタは、今や自分の主にして王である御者への感謝の言葉で信仰告白を結ぶのである。(Thanks to my Lord and King. p. 362)

判決の翌朝早く、牢より出されたカリスタは、まるで死体であるかのように地面に放り出されたが、朝の新鮮な空気が彼女を生き返らせ、彼女は意識を回復し、「おお美しい光よ」と呟く。あの方は彼女にとって真の光となっていたのだ。いや、光そのものである。O beautiful Light! と光は大文字で書かれている。O lovely Light, my light and my life! O my Light and my Life, receive me! (p. 367) その方は光そのものであり、命そのものであって、⁽²⁵⁾彼女の光、彼女の命なのだ。彼女を贖い、彼女の為に死んで下さったその方の為に、今彼女は命を捧げようとしている。刑の執行場所は町の北東、城壁の外で、山に近く、奴隷たちが葬られる場所である。刑の執行が近づくに連れ、彼女の表情は変化し、その顔にはかつてなかったような穏やかさと慎ましさが現れ、頬はかすかに染まり、目は群衆には見えない何者かをしっかりと見つめているようで、⁽²⁶⁾唇は安らかな平和と深い落ち着きを語っていた。

変化していったのはカリスタの表情だけではなく。叫び、喚きながら物見だかに集まってきた群衆もまた変わっていった。最初好奇心でいっぱいだった彼らは、驚きの感情と畏敬の念に打たれ、やがて恐れ、憐れみの感情へ、そして更に尊敬へと変わっていった。ほとんど拝みたいような気持ちにさえなっていたのである。

刑具の上に横たわったカリスタは、愛する方に自分を捧げ、受け容れられるよう、最後の言葉を残し、主であり、愛である方のもとへと帰って行った。彼女が最後に残した言葉は、“For Thee, my Lord and Love, for Thee! . . . Accept me, O my Love upon this bed of pain! And come to me. O my Love, make haste and come!” (p. 369)であった。

カリスタの凄惨な死の場面の後、穏やかな勝利の喜びと感謝の祈りの裡に物語は再び天上的な静けさと平和に包まれる。愛によるカリスタの死は、地上の生の終わりではあっても、人格の消滅では決してなかった。それどころか、彼女の死は人格を完成させるものであって、更にその人格的影響が死後も続いていくものでもあることを示している。

これまで、カリスタが内面の変化を経験し、イエスという人格と主体的に出会っていった経過を見てきたが、それを以下に要約しよう。

その生まれ育ったギリシャ的精神風土の影響にもよるであろうが、カリスタは、創造の背後にある力と威厳、知恵と善による宇宙の支配を認めていた。しかし、そうした存在は抽象的なものに過ぎず、観念的には存在し得ても、そこには彼女の心を満たし、人格を傾けて関っていただける位格(persona)はなかった。また異教の神々は理解し易かったが、そのような神々には人格的に関わっていただけるような品位を見いだすことはできなかった。⁽²⁷⁾彼女は“徳”の美しさを認めていたが、徳もまた抽象的なものであり、⁽²⁸⁾人間が道徳的完全性を目指していく場合にも、目的は“有徳な人間”になること、つまり中心はあくまでも自分であって、⁽²⁹⁾彼女の心を動かすには足りなかった。カリスタは心の奥深くで、「これをしなさい」と命じたり、「これをしてはならない」と禁じたりする声のようなものを常に感じており、彼女はその声に忠実に生きてきた。しかし何よりも、彼女の魂の真実の渇きは、自分の全人格を賭けて全身全霊を挙げて愛することのできる人格的な対象へ向かうものであった。また、義務とか功德とかにはおよそ無関

係に、愛による魂の交わりこそが宗教の本質ではないだろうかと直感的に感じていた。

福音書のなかには、彼女の知性が長く求めていたもの、彼女の心の中に語りかけていた声、カイオーニ、アジェリアス、シシリアスたちの中で親しい交わりをしていた方、これらすべてが一つの生きた具体的な人格を具えた人としておられ、その方は彼女に語りかけてきた。⁽³⁰⁾これこそ彼女が求め続けてきた絶対である「人格的な対象」であったのである。

その対象がはっきりしてくるにつれて、カリスタは自分を客観化し受容するようになっていった。そしてその人格との出会いは、自分の真の姿との出会いの深みで行われた。己を認めて受容することは、真に謙遜の行為であるが、それは直ちに恩寵を受け入れる素直で従順な態度となり、恩寵は更にそれに全面的に依存する信頼へと彼女を導いた。単純かつ柔和に恩寵と招きに応じていこうとする彼女の魂の姿勢は、彼女を自尊心と自己中心からも解放し、他人に対して己を開かせていった。このようにして自己から解放されたカリスタは、その絶対の人格に全幅の信頼を置いて自己の一切を賭けること、即ち死に身を渡すことをもはや些かも躊躇しなかった。真実で永遠の愛に目覚めた今、人格的にその愛に応えるという行為は、死を引き受けることに他ならなかったからである。

カリスタは全生涯を通じて、一意専心目標へ向かって突き進んだ。自分とは別の、また自分を越えた絶対の人格的存在を知った時、その存在を認め受け容れるだけではなく、その存在からの呼びかけに応え、自分の全エネルギーをその存在に捧げ尽くしていこうとした。心から謙遜になって自己を離れ、己を捧げざるを得なかったのである。それは彼女の生涯を通じての抗し難い魂の憧れでもあったからである。通常人は生涯をかけて少しずつその人格を完成させていく。しかし、心の中の声にあくまでも忠実であり、一貫して絶対の価値を追求して人格的統一を遂げたカリスタは、十八歳にして既に成熟したパーソナリティをもって人格を完成させたと言えよう。⁽³¹⁾しかも、命までも捧げる愛において、彼女は短時日のうちに最高の自己統一を遂げて人格を完成させ、その結果最も高貴な徳を達成したのである。

(1992年11月25日受理)

註

1. ニューマンは、人は生まれつきの資質を変えることは出来ないが、人格は完全性に向かって生成発展するので、しかもそれは生命による生きた成長であるという。(An Essay in Aid of A Grammar of Assent, ed., I. T. Ker, Clarendon Press, Oxford, 1985, p. 225). 以後、『承認の原理』(A Grammar of Assent)からの引用はすべて、この‘critical edition’による。ニューマンの著になるものは著者名を省く。出版社名及び発行年が記されていないものは、ロングマン社(Longman, Green, & Co., London)の‘uniform edition’(ロングマン社が1890年以降第二次世界大戦で破壊される時まで出版していたもの)による。
2. “Religion is of a personal nature, and implies the acknowledgment of a particular Providence, of a God speaking not merely to the world at large, but to this person or that, to me and not to another.”(Lectures on the Doctrine of Justification, p. 323.)
自然宗教は神を教えるが、神の位格(persona)という概念はない。(‘The Influence of Natural and Revealed Religion Respectively’ University Sermons, p. 22,23.) See also: ‘The Theory of Developments in Religious Doctrine,’ University Sermons 15, p.330.
3. ニューマンは、啓示の本質は真理の単なる集成や哲学的見解ではなく、宗教的な感情や精神、また特別な道徳でもないと言う。それは意見の集合のようなものとは対照的に、それ自体を証し、それ自体一つに保つもので、あらゆる時と場所で唯一同一のものとしてすべての人々に語りかけるものである。そして語りかけられた人々は、直接神から与えられた一つの信条、規律、礼拝として、それを理性的に受け容れるよう要求する権威ある教えであるとする。(‘Inference and Assent in the Matter of Religion’ A Grammar Of Assent, p. 250) See also: Ephesus 4: 4—6.
4. “This, then, is the history of what else is so strange: that He should have taken my flesh and died for me. . . . Did He not love me so inexpressively, He would not suffered for me. I understand now why He died for me, because He loved me as a father loves his son—not as a human father merely, but as the Eternal Father the Eternal Son.” (Meditations and Devotions, Longman, Green, and Co., London, 1893, p. 402—403)

5. 心に内在する三位一体の神との親密な交わりは、ニューマンの霊性の根幹をなすものである。
6. ニューマンがカトリックへ転会した時の心境と似ている。
7. "What can give me happiness but Thou? If I had all the resources of time and sense about me, just as I have now, should I not in course of ages, nay of years, weary of them? Did this world last for ever, would it be able ever to supply my soul with food? Is there any earthly things which I do not weary of at length even now? Do old men love what young men love? is there not constant change? I am sure then, my God, that the time would come, though it might be long in coming, when I should have exhausted all the enjoyment which the world could give. Thou alone, my dear Lord, art the food for eternity, and Thou alone. Thou only canst satisfy the souls of man." (*Meditations and Devotions*, op. cit., pp. 443—444) See also: 'The Invisible World' *Parochial and Plain Sermons* IV.
8. カリスタは、心のなかの呼び掛けに従うときには満足と喜びを感じ、それに背くときには友人を裏切ったときのように感じるのである。ニューマンは心のなかにある宗教の根本原理として良心 (conscience) をあげ、("Our great internal teacher of religion is our Conscience." *A Grammar of Assent*, p. 251) 良心は、人間の魂と魂以上のそれに優るあるものとの関係を暗に含むものであるとする。人間は心の中に魂を監視するような存在を感じているが、良心とは、将来の報いまたは罰が、それに従って行動するか否かに結び付いていると感じるような心の中にある根本原理のようなものを指している。人間はこの心の中の監視者を尊重して従えば従うほどその指導はもっとはっきりとしてくるし、内面の力は増し、道徳的にも進歩していく。このようにして良心というのは自然宗教の善悪の基準となるものでもあり、道徳の規範となるものであるとする。これについては次稿で論ずる。
9. カリスタの心の中の激しい渇きをギリシャの神々や偶像は満たしてはくれなかった。哲学者たちの知恵も道徳主義者たちの言う徳も彼女に安らぎを与えることは出来なかった。彼女の心の奥深くあった真実な渇きは、彼女自身の全人格をかけて愛することのできる「人格的な対象」であったのである。その意味でカリスタはまだ幸せではない。こうした激しい渇きが満たされてはじめて真の幸せ、真の平和がえられるはずである。ニューマンは次のように言う。「空腹や乾き、味、音、臭いなどが、体が喜びを感じる手段となっているように、魂が喜びを感じる手段は感情である。感情が順当に働けば幸福であり、感情が発達していなかったり、抑えられていたり、妨害されたりしていれば幸福ではない。知ること、影響を与えること、または追求することなどではなく、愛すること、希望すること、喜ぶこと、感嘆すること、崇敬すること、礼拝すること、これらが我々の本当の幸福である。我々の心がそこに憩うことができ、満たされることのできる対象を所有することに真実で無上の喜びがある。」(長倉訥 'The Thought of God, the Stay of the Soul' *Parochial and Plain Sermons* V. XXII, pp. 315—316)
10. 中間地帯にいるカリスタを次のように表現している。
She could safely say, "I discard Jupiter : " she could not say, "I am a Christian." (p. 317) She had neither the promise of this world, nor of the next. (p. 318) And as heretofore she had cast her lot with the world, yet had received no price for her adhesion, so now she had bid it farewell ; yet had nothing to take in its place. (p. 318)
11. ここにはニューマンのパーソナリズムが簡潔に、しかも包括的に表現されている。つまり、知性が求めている対象としての Person、心のなかの語り掛けとしての Person、そして親しい交わりとしての Person である。これらは一つになって具体的な生きた一人の現実の人間としてカリスタの前にその姿を表わすのだが、ここでは "He" "Voice" "Person" というように大文字で表現されていることに注意したい。
12. "Self-knowledge is at the root of all real religious knowledge." "God speaks to us primarily in our hearts. Self-knowledge is the key to the precepts and doctrine of Scripture." ('Secret Faults' *Parochial and Plain Sermons* I. p. 41—42.)
13. Luke 1 : 51—52, II Corinthians 12 : 9
肉体的にも霊的にも死を体験し、真の再生を経て、変化せざるお方によって変えられなければならないとニューマンは言う。See : *Meditations & Devotions*, op. cit., p. 58.
ターディヴェルは、『カリスタ』には祈りの雰囲気が充満していると指摘 (Tardivel, Fernande, et. al., *La personnalité littéraire de Newman*, Paris, 1937, p. 51) するが、カリスタの内面が大きく変化し、人格完成へ向かって魂が昇華されていく部分は、まさに祈りそのものである。ニューマンは丁度『カリスタ』を書いてい

- た頃、*Meditations and Devotions* の‘Hope in God—Redeemer’を書き始めており、本書の大部分は『カリスタ』執筆と時を同じくしているので、両者には共通して、ニューマンの魂のほとばしりとしての祈りが感じられる。(See: Merior Trevor, ‘Introduction’ *Meditations and Devotions*, Burns & Oates, Belgium, 1964, vii)
14. 我々以上の存在を認め、それに仕えていくときに、自己を忘れ、本当に謙虚になっていく。(See: ‘The Inference of Natural and Revealed Religion Respectively,’ op. cit., p. 28)
15. “I should not love Thee at all, except for Thy grace. It is Thy grace which has opened the eyes of my mind, and enabled them to see Thy glory. It is Thy grace which has touched my heart, and brought upon it the influence of what so wonderfully beautiful and fair.” (*Meditations and Devotions*, op. cit., p. 450) See also: ‘Nature and Grace’ *Discourses Addressed to the Mixed Congregations*, VIII, Matthew 16: 17, Luke 1: 49, John 6: 44.
16. ニューマンにとって信仰とは、単に神から啓示された真理を承認することではなく、その真理に従って人生を歩むこと、愛と従順をもって全人格を傾けて神の意志を行って生きることであった。(P. Flanagan, ‘Introduction’ *Newman Against Liberals*, 25 Classic Sermons by John Henry Newman, Selected with a Preface by Michael Davis, Augustine Pub. Co., 1978, p. 16.)
17. II Corinthians 12: 9—10.
18. Galatians 5: 22, John 14: 27.
19. 「見えない世界」(‘The Invisible World’)に次のようにある。「どれほど空想をたくましくしたとて、信仰のうちに息絶えて歓喜に目覚めるときの感情は、誰にも想像し切れないでしょう。その時始まった生は永遠に続くことを私たちは知っています。しかしきっと、もしそれ以後も私たちの記憶が現在と変わらないなら、永遠の世界を通じて、その日を主への感謝の記念日として祝い続けることでしょう。知識も愛も永遠のなかでますます強化されるでしょうが、それでも、私たちが死者のなかから初めて目覚めたその日、私たちの誕生と婚姻が同時に行われた日は、私たちの思いのなかでいつまでも大切にされ、神に感謝する日となるでしょう。」(萩原博子訳『心が心に語りかける』中央出版社1991, 39—40頁)
20. 対者の絶対なる独立性の認識から始まった人格的な愛は、カリスタに真の個の発見をもたらし、主観性から解放して、徹底した自己放棄へ向かわせた。ここにアガペーたる愛を見るが、これについては次稿で論じる。See: *Meditations and Devotions*, op. cit., p. 58.
21. エロースが自己中心の愛であるのに対し、アガペーは自己を他に開かせる愛である。
22. See: *Meditations and Devotions*, op. cit., p. 446
23. Ibid., p. 101.
24. “To possess Thee, O Lover of souls, is happiness and the only happiness of the immortal soul! To enjoy the sight of Thee is the only happiness of eternity.” (Ibid., p. 442)
25. John 1: 4
「光り」はニューマンの生涯と思想によく出てくるテーマである。(Tardivel, et. al., op. cit., p. 378)
26. Acts 7: 55
27. 哲学の神は無限に偉大であるが、抽象的なものであり、異教の神々は理解することは出来ても人間の考えによって品位を落されたとニューマンは言う。See: ‘Inference of Natural and Revealed Religion Respectively,’ op. cit., p. 24.
28. 哲学者、道徳主義者は人間の道徳的完全性を目指すであろうが、徳の美しさは抽象的なもので、人間の心を動かし、人格的に関わっていくことは出来ない。See: Ibid., pp. 23, 29.
29. 単なる優越性を尊崇する場合、人がその方に向かうのではなく、それを自分の方に引き寄せてしまう。Ibid., p. 28.
30. ‘God speaks to us in two ways in our hearts and in His Words.’ (*Parochial and Plain Sermons* II, p. 103)
31. “Callista’s venture of faith, . . . , is not a sudden turn-about, but a gradual development which fulfils the needs of every side of her personality.” Alan G. Hill, op. cit., p. 38.
- 人格は成熟するのか、また完成することができるのかといった問題は、心理学で論じられるべき大きな問題であるが、本稿の論旨からは離れるのでここでは割愛する。